

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第178号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2006.02.22 (水) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1398 部\*\*\*\*\*

---

□ 目次 □-----

<巻頭言>

「日本に農業が存在しなければならない理由は何ですか？」 安富 六郎  
<80才からのメッセージ>

農林統計の現場に生きている近藤先生の遺志 原田 勉

<老兵の戯言> 韓国メディア 藤原 昇

<野火止用水開通の風景> その3 通水の条件 安富 六郎

<編集後記> 餅搗き会の写真

---

<巻頭言> 「日本に農業が存在しなければならない理由は何ですか？」

---

『電子耕』No.172-2005.12.01号に林尚孝氏はある農民作家の講演に聴衆からでた上の質問を紹介し、これに対し各自が自問することの必要性を述べている。この質問には、「何も全く分からない人」を別とすれば、2つの解釈がある。一つは農業の存在を肯定したうえでの質問。もう一つは農業存在の否定である。

「農業」は要らないと言う場合、他の言葉に置き換えてみてはどうだろう。「工業」「科学」「文化」……何でもよい。「〇〇の存在しなければならない理由は何ですか」と聞かれたら、戸惑うだろう。利潤追求、とする考えならば、その解は「儲かるかどうか」ということに集約される。

人の命の大切さを物差しに取れば、互いに協力して健康な生活をすることを誰しも願うはずだ。それを保障しているものは食べ物であり、それを作っているものは土、水、空気と太陽と緑、それに人である。これが全体に機能して、はじめて健康な生活の基盤となる。

いま、われわれは食料の半分以上を外国に頼っている。耕作放棄地が増加すれば水田は本来の環境調節機能を発揮できない。このような状況が続けば、わが国固有の自然のバランスは大きく崩れることになろう。健康と命を守るための農業と環境の関わりを考えれば「農業は要らない」どころではない。それに凶作にでもなれば外国依存にも限界はある。

残念なのは、わが国の知識人にもこのような日本農業不要論者がいると聞いていることだ。しかし、自問すると、これへの反論は容易ではない。価値観の相違もある。農業者・農学者は「何も全く分からない人」にも説得力ある自明の論理を持たねばなるまい。

安富 六郎

山崎農研会員 電子耕編集同人

y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<80 才からのメッセージ> 農林統計の現場に生きている近藤先生の遺志

---

山崎農研の会員で、長野県安曇野市の橋渡良知さんからの報告が来た。

昨年 12 月、統計情報センターが主催する農林統計情報懇談会があった。職員の調査や情報の報告が終わってコメントを求められた。

近藤康男先生が 106 歳の生涯を閉じられた直後だったので、コメントで、「近藤先生は農林統計を整備された最大の功労者だが、今日の報告を聞いて、先生の遺志が現在の職員に生きていると思った。」と話した。あとの懇談会でも役職の方から、近藤先生のお名前が出て懐かしかった。と言われた。事実、センターの若い職員の報告は視点が確かで、学究的でさえあった。

この橋渡さんのお便りに、私は驚いた。戦後 60 年たって近藤先生の教えが、現地の若い調査員の心に遺っていることに感動した。近藤先生は、供出制度の公平化・民主化を願って、作物報告事務所を創設された。

「作報」が扱う農林統計に客観性と科学性を持たせるように努力された。とりわけ稲作の試験研究と密着し、「作報」が発表するコメの統計は信頼度が高

いものとなった。また、先生は部落統計を重視されたが、この集落の統計が明快で、しっかりしているので、減反政策も容易に受け入れられているという。

橋渡さんによると、「既に今年の地区別のコメの目標生産数量が示されているが、集落では、それをすぐに減反面積にして今年の作付を考えている。発足2年目になるコメの「集荷円滑化対策」などは、統計の作況を頼って成り立っているようなものである。これからのビジョンづくり、さらには集落営農も統計が示す数字が頼りである。」という。

農林統計の伝統が、このように、その気質を受け継いで今日に至っているということは知らなかった。

今年の4月から、府県の農政事務所と各地の統計情報センターが統合されるという。戦後農村・農民に最も身近な現地機関は、かつての食糧事務所と作物報告事務所であった。それが形を変え統合されるという。

近藤先生は、その両方にかかわりがあり、指導的役割を果たしてこられた。現在の現地機関が、先生の遺徳を継いで、農村・農民のために力を尽くしてもらいたいと思う。

虎は死して皮を残し、人は死して名を残すという。まさにこのことである。

<参考リンク>

関東農政局長野統計・情報センター

<http://www.nagano.info.maff.go.jp/>

長野農政事務所

<http://www.nagano.info.maff.go.jp/nousei/>

「作報」に関する当時の議事録から政府委員であった近藤先生の発言

参議院会議録情報 第005回国会 農林委員会 第23号

昭和二十四年五月二十日（金曜日）

○地方自治法第五十六條第四項の規定に基き、作物報告事務所の新設に

関し承認を求めるの件（内閣送付）

<http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/sangiin/005/0802/00505200802023a.html>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

tom@nazuna.com

<http://nazuna.com/tom/>

---

<老兵の戯言> 韓国メディア

---

先の「ES細胞」研究の「ねつ造」騒動で、大きな役割を果たした韓国メディアに、何故か、感動した。ほんの数年前まで「言論統制的」雰囲気が残っていた、あの国で、世界的英雄が「地に落ちる」程の報道がなされたことに、ある種の驚きさえ覚えた。

20数年前、筆者は、初めて、あの国を訪れた。丁度、「負け犬の一人」として「傷心さめやらぬ」思いで、北米から帰った直後であった。何よりもまず訪問したかったのが「板門店」であった。途中、「ここからは、韓国人は入れません」という場所を過ぎ、いよいよ「境界線：真空地帯」に入ろうとした時、「身に起こった全てに責任をとる」という趣旨の紙片に署名した。ソウルで開催された国際会議の直後であったが、訪れた日本人は、筆者一人であった。出発前から、複雑な「手続き」をとって「やっと」のことで入手した「特別許可」であった。

同じ民族の「分断」という現実を目の当たりにして、何ともいえぬ複雑な気持ちになったのを覚えている。あの頃は、まだ、色々な制限があって、「難しい国」だな、と思った。

現世では、一見「豊かな」生活をしていると錯覚している「民衆」を、マスコミによって「マインドコントロール」することは、いとも簡単である。「そんな」現実が、身の回りの「あちこち」で起こっているのに、誰も気づかないのは不思議である。それは、大衆が「無知」であるからだ。

しかし、韓国や中国では、今でも、学生が様々な「デモ」に参加し、「自国」の動きに対して、はっきりと「意思表示」をしているのは、素晴らしいし、何故か、懐かしい。1962年に大学を出た筆者には、「学生運動」が、輝いて見える。それは、その国を動かすのは「若い力」である、ということを知ってい

るから。

先進国と言われている日本で、研究の「ねつ造」などという不祥事「報道」が、絶対になされないことを信じたい。

藤原 昇

山崎農業研究所会員・中国・浙江大学・客座教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

### <野火止用水開通の風景> その3 通水の条件

---

問題の水路は関東ロームの台地に掘られた素堀水路である。台地の地下水面はかなり低い。しかも火山灰土は透水性が良いから漏水も激しい。干天続きで表層は乾いたとき、水分補給は地下水面からの毛管上昇によるが、この毛管上昇は通常の砂では1mはあるだろう。粒子の細かいロームでは毛管水の上昇高は10mくらいにはなりうる。それ以上であると、毛管水は切れ易くなり土の湿り気は著しく低下する。20m以上も深い地下水の野火止では微細土粒子は土埃になって強風で舞い上がるのは当然であろう。このように干天時の土の湿り気は地下水の高さに影響される。

白石の紳書の描く野火止の風物詩は関東ロームの典型的な土埃の様子である。乾燥した関東ロームの微細粒子はわずかな吸湿で凝集するから、工事完了後1年目に周囲の砂塵の収まる傾向にあることは、土がわずかに湿ってきたものと理解される。その時点では地下水位はまだ、かなり低かったであろう。

さらに1年後、水路周辺の草木が生きいきとしてきたこと、そして畑の収穫も良くなってきたことは用水路近くの土壌に毛管水分が供給されてきた証拠である。さらに1年後には毛管水分領域はかなり上昇したのであろう。たまたま、このとき大雨となった。その洪水によって、全水路に水はみなぎり一気に開通したことになる。

目的地まで水路に水が流れる条件は、

$$(\text{水路への給水量 } Q) - (\text{土中にしみ込む量 } P) > 0$$

である。そこで土水路表層の1日の漏水深を50cm～100cmと置き、野火止の水

路長 24km、漏水の底幅 1.5m として土中にしみ込む量 P を計算すると、  
 $P=0.2\sim 0.4(\text{m}^3/\text{sec})$  となる。

一方、野火止用水への玉川上水からの給水量は本流から 1/3 の分流とされているから、水路への給水量  $Q\div 0.33 (\text{m}^3/\text{sec}^*)$ 。P と Q を比較すると、給水量 Q はしみ込む量 P を上回る可能性は少ない。さらに乾燥土の初期漏速度は一般に安定値 P の数倍は大きいから、工事完了後、直ちに通水できたか否かは微妙なところとなろう。

以上の仮定を置いた計算から解釈すれば「萬之覚」の即時通水には疑問が残る。だからといって「紳書」の 3 年説も正しいとは言えない。ここで、さらに、なぜ通水に成功したか。その通水にどのくらいの時間を要するかが問題になるう。

(\*玉川上水の推定流量  $1\text{m}^3/\text{sec}$ )

安富 六郎

山崎農研会員 電子耕編集同人

y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<編集後記> 餅搗き会の写真

---

昨晚、帰宅したところ食卓の上に写真が置いてあった。次男が通う幼稚園で 1 月に行なわれた餅搗き会の写真だ。餅を搗くのはお父さんで、子どもたちはかたちだけなのだが、次男は頬をほんのりと染めた、高揚した表情で写っていた。

町場の幼稚園であるから、搗き手もど素人ばかり。わたしも含めへっぴり腰の人が多く、勢いあまって餅ではなく、臼を搗く人もいた。

しかし次男にとってはそんなことはどうでもよかったのだろう。自分のお父さんが、友だちの前でぺったんぺったん餅を搗く、それだけでうれしくてたまらなかったのではないか。

2006 年 02 月 22 日

山崎農業研究所会員・田口 均

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。

2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。

3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、117号から発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

-----

次回 179号の締め切りは03月06日、発行は03月09日の予定です。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 178 号

最新号・バックナンバーの閲覧

<http://blog.mag2.com/m/log/0000014872>

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

購読申し込み／解除案内

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2006.02.22 (水) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\*ここまで『電子耕』\*\*\*\*\*

.